

人生の半分以上を立川で生きてきた仁恵にとっても、クリスマス時期のサンサンロードは心躍る景色だ。ひさしぶりに孫と会える喜びも加わって、近隣のイルミネーションもやけに輝いて見える。

立川駅まで歩いていく途中、息子から「少し遅れる」と連絡があったので、ベーカリーカフェで熱いコーヒーを頼んだ。支払いを済ませていると「仁恵さん」と呼ばれた。友人の恭子が奥の席から手を振っている。

「なにしてるの？」

隣の椅子に腰をおろして仁恵は聞いた。

「プレゼント買いに来たの」と恭子は答えた。

「あなたのところもお孫さんが来るの？」

「来ない来ない。息子の枕元に置いてやろうと思って」

「息子さん？ いくつよ」

「四十になりましたよ。実家にね、居座り続けて四十年。無理に結婚って時代でもないし、よく考えたらこっちも助かってるしで。クリスマスのせいでもしないと、いまさら恥ずかしいじゃない」

「サンタの真似事するほうが恥ずかしいんじゃないの」

「まあ、いいのよ、素直じゃないのはお互い様だから」

ひとしきりおしゃべりしたあと、仁恵は駅に向かった。息子家族が改札を出てきたとき、仁恵は「帰ってきてくれてありがとう」と、これまでにない素直さで言った。そんな母子関係ではなかったから息子も驚いた顔を見せた。サンタのせいにしたほうがよかったかなど、仁恵は照れながら孫と手をつないだ。

Precious Time with Family

Message
